

■リーダーズ・ナウ [在学生インタビュー]

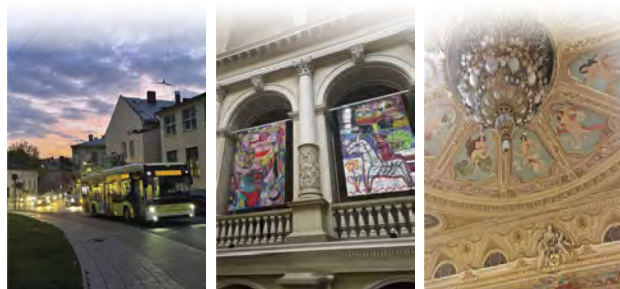
ウクライナへの想いとともに、 日本で切り拓く未来

——現代日本文学の魅力を探究

◎文学研究科 総合人文学専攻 国語国文学専修
博士課程前期課程2年次生
ポルチェンコ・マリア・ソフィアさん

いまだ戦禍が収まらないウクライナから、憧れていた日本へ留学中のポルチェンコ・マリア・ソフィアさん。UNHCR難民高等教育プログラム(RHEP)*の支援を受け、関西大学で日本文学の研究をさらに深めている。日本での暮らし、祖国ウクライナにいる家族や未来への想いについて話を聞いた。

※「UNHCR難民高等教育プログラム」(Refugee Higher Education Program : RHEP)
国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) と特定非営利活動法人国連UNHCR協会 (2025年10月から一般社団法人RHEP難民教育推進協会に運営移行中) が運営する、難民が大学や専門教育を受けられる機会を提供する、日本独自の支援制度。プログラムを実施するパートナー大学は、全国で学士課程15校、修士・博士課程は7校 (関西では関西大学含め2校)。



▲ソフィアさんの出身ウクライナ西部の都市リヴィウの街並み (写真左) と
ウクライナ・リヴィウ国立大学 (写真中)、リヴィウ・オペラ・バレエ劇場の天井画 (写真右)

◎2度目の日本留学で関西大学へ

ロシアがウクライナへの侵攻を開始したのは2022年2月。祖国を離れて関西大学に留学中のポルチェンコ・マリア・ソフィアさんは、「日本にいても、打ち上げ花火の音が聞こえてくると、爆撃の音のように感じる時があります。だいぶ慣れてきましたが、今でも少し不安になります」と話す。

ウクライナのイヴァン・フランコ記念リヴィウ国立大学文学部でソフィアさんは、日本語・日本文学及びウクライナ語・ウクライナ文学を学んだ。「在学中は言語学習と文学研究の両方に取り組み、特に日本語と日本文学を中心に専攻しました」。三島由紀夫の『金閣寺』や芥川龍之介の『羅生門』など、ウクライナ語に翻訳された日本文学にも数多く触れ、特に近代文学に熱心に取り組んだという。「言語としての日本語がとても好きです。発音も覚えやすいですし、漢字を覚えることがすごく楽しい。授業でつまらないと思ったことは一度もありません」。



▲関西大学のキャンパスで学びを謳歌するソフィアさん

柔道経験のある父親から日本の歴史や文化について話を聞き、日本には幼少期から興味を持っていた。初めて来日が実現したのは2022年10月、リヴィウ大学を1年休学して茨城キリスト教大学に留学した。

茨城キリスト教大学では日本映画を鑑賞して日本語でレポートを書いたり、英語の授業ではスタッフとして教員のサポートをしたり、留学生として充実した毎日を送った。「留学するまで家族と離れて暮らしたことがなく不安でしたが、友人もたくさんでき、プライベートの時間も楽しく過ごすことができました。日本で多くのことを学び、自分自身の成長も感じる事ができた貴重な経験でした」。

リヴィウ大学卒業のため一度ウクライナへ帰国した後も、再び日本への留学機会を探していたソフィアさんは、関西大学の特別聴講生として再来日し、半年間にわたり授業を履修。「また、聴講生として大学院進学を見据え、増田周子先生のゼミに参加したほか、関西大学の先生や国際部の方々のご支援のもと、日本語学習の機会もいただきました。こうしたご配慮により、日本語能力の向上につながる貴重な学びの機会となりました」。

◎「学びたい」という思いを抱く人々を支援

「自然と大学院進学を考える中で、関西大学の国際部の方からRHEPというプログラムを教えてくださいました。戦争によって住む場所やパスポート等の身分証明も失い、最低限の物だけを手に国外へ避難せざるを得ない——そうした極限の状況でも、『学びたい』と思う人々のための支援があることに心を動かされました。私の家はウクライナにまだありますが、戦争は今も続いています」。

RHEPの受験を決意したものの、準備や試験は想像以上に大変だった。日本語能力試験 (JLPT) のN2を取得済みで文法には自信があったというソフィアさんだが、試験では最難関のN1レベルの日本語や難解な漢字も多く出題されたという。「私は心配性なので、試験結果を聞くまでずっと不安でした。合格と知った時は、うれしいより先に驚いてしまって。母に伝えると『私の娘は素晴らしい!』と喜んでくれて、本当にうれしかったです」。

◎日本近現代文学を読み解く

現在は文学研究科に在籍し、日本近現代文学をテーマに、作品世界を丁寧に読み解く研究に没頭する。研究題材に選んだのは、『君の膵臓をたべたい』で有名な住野よるの長編小説『また、同じ夢を見ていた』。「小説の中で特に心に響いた『皆、違う。でも、皆、同じなんだ』という言葉がキーワードに研究を進めています。比較的新しい作品のため先行研究が少なく、自分の分析や考察が新たな発想へとつながるかもしれないと、やりがいを見出しています」。



▲指導教員・増田周子教授 (文学部) の「日本近代文学研究」を受講



▲日本語の勉強ノート

関西大学の国際学生寮で暮らす
エジプト出身の留学生と▶

キャンパスでは特に図書館の地下書庫がお気に入り。お金がない時には大学の「100円朝食」も利用しています。最近はティーチング・アシスタント (TA) として授業の補助もしていますが、学業に専念できる環境には感謝しかありません」。

関西大学の国際学生寮「秀麗寮」で暮らすソフィアさんは、同じ寮に住むエジプト出身の留学生と、海やUSJなどへ出かけることもあるという。ライブ等を運営するイベント会社でサポートスタッフとしてアルバイトに励むほか、関西大学にゆかりのあるウクライナ出身の力士・安青錦関の取組を観戦したり、大阪・関西万博で開かれた平和と人権のトークイベントに登壇したりするなど、日本での時間を豊かなものにしている。



ポルチェンコ・マリア・ソフィア

■2002年ウクライナ・リヴィウ生まれ。イヴァン・フランコ記念リヴィウ国立大学在学中に茨城キリスト教大学へ留学。リヴィウ国立大学卒業後、関西大学特別聴講生を経て、UNHCR難民高等教育プログラムに応募し、2025年関西大学大学院に入学。日本語能力試験 (JLPT) N2取得。最近覚えた好きな日本語は「穂穂」「夕風」。

◎日本で幸せな将来を見つけるために

2025年の夏、2年ぶりに帰国して家族と一緒に過ごした。今も空爆があれば地下や避難所で怖い思いをしながら夜を過ごす。「しかし翌朝には、皆寝不足のはずなのに、メイクをして服装を整えて、何もなかったかのように仕事へ向かいます」。ウクライナには日常と戦争が混在、隣り合わせの現実がある。「将来、ウクライナでも働くことはできますが、戦争の影響で働く人は少なくなっています。母からは『なぜ日本へ行くの? 私たちと一緒にいればいいのに』と言われますが、一方で『あなたには幸せになってほしい』とも言ってくれます。もちろん私も家族と一緒にいたい気持ちはありますが、幸せな未来を掴むため、日本で頑張りたいと思っています」。

現在は就職活動中だが、「日本は企業が多くて選択肢がたくさん。メディアやエンターテインメント業界に興味があります」と話す。募集の有無に関わらず、関心のある企業には自らコンタクトを取るという。「仕事を選ぶ上では、自分が成長できるかどうかを重視しています。日本で挑戦してみたいことは尽きません」と目を輝かせた。